

柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯北部の最新活動時期の再検討 Re-examined last fault event of the northern part of the Yanagase-Sekigahara Fault Zone along the Echizen Coast.

山本 博文^{1*}, 平井 祐太郎¹, 杉山 雄一²
Hirofumi Yamamoto^{1*}, Yutaro Hirai¹, Yuichi Sugiyama²

¹ 福井大学, ² 産総研活断層・地震研究センター

¹Fukui University, ²Active Fault and Earthquake Research Center, AIST

2012年度文科省「沿岸海域における活断層調査」の一環として、柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯北部の最新活動についての再検討を行った。

調査地点は、北は福井市和布から南は越前町米ノまでの越前海岸の岩礁地帯である。調査では離水地形や穿孔貝の巣穴の保存状態の良い8地区（北より布良地区、亀島地区、鮎川地区、佐武地区、大味地区、越前岬地区、森腰隧道地区および米ノ地区）を中心に地形測量を行うとともに、岩礁に残されている生物遺骸を採取し、年代測定をおこなった。さらに越前海岸沿いの遺跡データについて福井県埋蔵文化財調査センターの協力の下、再検討した。

隆起量は波食棚の広がりや保存状態の良い穿孔貝やウニの巣穴の上限から、和布では3.2~3.4m、亀島では6.8~7.0m、越前岬周辺では6m近い隆起量が推定された。これらの数mにも及ぶ隆起が、断層の最新活動1回によるものか、2回の隆起を合わせたものなのかを明らかにするために、岩礁の上部から下部まで生物遺骸を採取し、その年代を比較した。その結果、上部と下部とで年代差はほとんど見られず、また穿孔貝の巣穴が波食棚面近くまで連続しており、その保存状態も良好であることから、数mの隆起は一度の断層活動によるものであると推定した。

次に隆起時期、すなわち断層の最新活動時期について、岩礁から採取された生物遺骸の放射性炭素同位体年代および遺跡の年代から推定した。生物遺骸の年代は離水前の年代を示しており、その多くは17世紀頃に集中していたが、調査地域の南部と北部では、越前岬以南の南部がやや新しい年代を示す傾向にあった。一方、数mの高さにある遺跡データを見ると、17世紀の遺跡が報告されている。以上の年代値からすると、最新活動時期は越前海岸北部では16世紀後半~17世紀前半、南部では17世紀の可能性が高く、同時に活動した可能性もある。しかしこの頃の越前海岸での地震活動を示す史料は見出されていない。

キーワード: 柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯, 越前海岸, 活動履歴, 活断層

Keywords: Yanagase-Sekigahara Fault Zone, Echizen Coast, paleoseismology, active fault